



TITLE:

吾妻山破裂の[追]憶

AUTHOR(S):

比企, 忠

CITATION:

比企, 忠. 吾妻山破裂の[追]憶. 地球 1925, 4(6): 475-476

ISSUE DATE:

1925-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183027>

RIGHT:

三津は造酒で著はれて居ると同時に竹原は近世柄崎、頼二家の文學を以て聞えて居る。(中村)

談 叢

吾妻山破裂の追憶

比 企 忠

明治二十五年には岩代の磐梯山が破裂し、二十六年には其隣りの吾妻山の爆發があつた事は今五十歳前後の人の記憶に残つて居るであらうと思ふ。磐梯山は其山部の大半を破壊して谷を遮り大な湖水を湛へ洪水を流して人畜に大な損害を與へたので有名となり、吾妻山は學術探検者である理學士三浦宗次郎君と其從者の西山惣吉君とが不幸爆發に遇ふて非命の死を遂げられたと云ふので名高くなつたのである。

吾妻山の破裂は新しい事實ではないが此度地

球は火山號を發刊せらるゝと云ふし、夫れが偶然にも本年は三十三回忌に相當して居るし、又三浦君と同時に遭難した西和田久學君と筆者はまだ健全であるのでこゝに爆發當時の模様を述べて火山史の一部を簡單に繰返し讀者諸子の想を新にし職に斃れたる兩君を追悼することも無意義でなからうと考へ貴重の紙面を塞ぐことゝした。

吾妻山と云ふのは澤山の火山の集りであつて其内の一番大きな火孔を持つて以前に硫黃を採集したことのあつた一切經山と云ふのが活動を始めたので磐梯山の如く山は破壊したのでなく唯火孔が少し大きくなつた位である。最初の爆發は五月十七日頃であり次に其月末と六月の四日とに大破裂と稱すべきものがあつた。之を調査する爲めに在學中の西和田君と筆者とが大學より出張を命ぜられ五日に出發した。丁度農商務省地質調査所よりは三浦西山兩君の出張があつて福島市で落合つて共に翌日登山して半日探見した。其間澤山に大小の爆發があつたが其勢力

は甚だ微弱である事が多く、噴孔の周壁の上を歩くことが出来、火孔内に於ける有様を良く観察することが出来た。而して活動は概略間歇的である事も判り、其日は山麓の溫湯ユツタに一泊し、翌七日再び登山した。

後年の櫻島の破裂の様な大な者であると種々學術上の面白い現象も見えるであらうが、吾妻山のは山の周縁に泥流がある、此泥流とても或は積雪の上に熱い灰が降つて融けた爲め泥流の形をして居るのではなからうかと想はれた。其深さは厚い處で三尺位であつた、又火孔中より熱せられてある岩片が大分出たが之は熔岩の様に流れた者でない、破片又は大な塊であるが他の岩と違つて大層玻璃質の岩石であるから、火孔内には多少熔岩的の岩石があつたものとも思はれさうであるから、此の山の活動と云ふのは唯灰と岩片を噴出したのみと云ふてよいのであるが、活動の時は火山學で云ふ通り地震も起つたし大なストームや電光なども見たが別に著しい事もなかつた。此日の午前十時の活動は四名

の者が丁度火孔近くへ行く登山の途中であつて多くの灰や岩片を降らし、最初に登つた三浦西山兩君は岩片に撃たれて斃れ、西和田君と筆者とは少し遅れた爲めに九死に一生を得たのである。

此三浦西山兩君の遭難は學術探検中職に斃れ學に死したと云ふので、世人の同情は絶頂に達して各地の新聞は一齊に其記事を掲げ東京の朝日新聞は其時分餘り例のない號外を發したのである。又福島市の官民が之に對する待遇は感謝の外なかつたのであつた。兩君の葬送の節は通路人を以て埋め中には涕泣して居つた者があつた様である、暫時東京は此話ばかりで吾等兩名も吾妻山の西和田、吾妻山の比企など云はれ永く世人の記憶に止められたのであるが、今や三十三年の昔となり當時三浦夫人の胎内に居られた令息宗充君も一家をなし年々筆者に年賀狀を送らるゝに至つた。當時を追想すれば實に感慨無量である。